

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。
■文中で旧 URL (<http://www.nougyou.kitakami.iwate.jp/agri/>) を記載している場合、新 URL (<http://i-agri.net>) に読み替えてください。

平成14年1月発行

病害虫防除技術情報 NO.13-3

岩手県病害虫防除所

りんご園におけるナミハダニ薬剤感受性低下の発現状況

ニッソラン水和剤、ピラニカ水和剤については、県内広く感受性の低下が確認され、アニバースMC、バロックフロアブルについては一部の園地で感受性の低下が確認された。一方、カネマイトフロアブル、マイトコーネフロアブルについては、全県的に感受性が高かった。

検定方法

1) 供試薬剤と内容

供試薬剤名(実用濃度)	防除基準 採用年度	検定ステージ	
		卵	雌成虫
ニッソラン水和剤(2,000倍)	S 6 1		
ピラニカ水和剤(1,000倍)	H 6		
アニバースMC(1,000倍)	H 9		
バロックフロアブル(2,000倍)	H 1 1		
カネマイトフロアブル(1,000倍)	H 1 2		
マイトコーネフロアブル(1,000倍)	H 1 3		

薬剤は主に平成13年防除基準採用の基幹剤を使用した。

同系統の薬剤のうち、ニッソラングループ(ニッソラン水和剤、カーラフロアブル)についてはニッソラン水和剤、ダニトロングループ(ダニトロンフロアブル、サンマイト水和剤、ピラニカ水和剤)についてはピラニカ水和剤を用いた。

2) 検定方法

秋期に発生が多かった園地から越冬成虫を採集し、累代飼育した後、検定に用いた。



ナミハダニの雌成虫と卵

薬剤感受性検定結果

ピラニカ水和剤は、雌成虫、卵に対して全県的に感受性の低下が確認された。十分な効力が確認されたのは、比較的ハダニ類の防除圧の低い県北部と沿岸部を中心とした一部の園地のみであった(図1)。

ニッソラン水和剤は、全県的に大幅な感受性の低下が確認された(図2)。

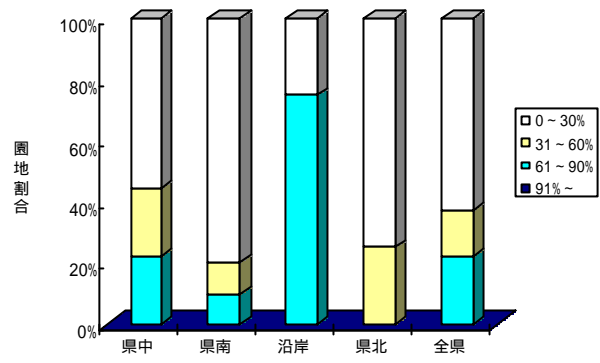
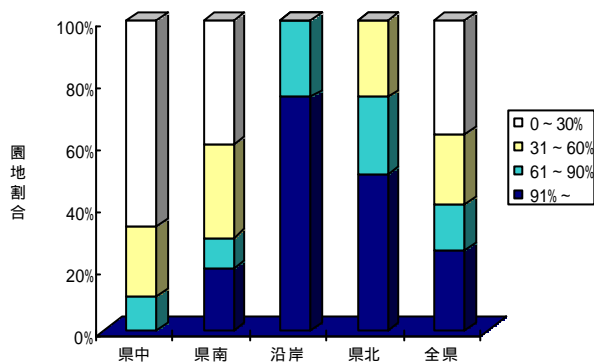


図1 ピラニアWP雌成虫に対する補正死虫率の園地割合 図2 ニッソランWP卵に対する補正死卵率の園地割合

補正死虫率：(対象区での生存率 - 供試薬剤での生存率) / 対象区での生存率 × 100
 補正死卵率：(対象区でのふ化率 - 供試薬剤でのふ化率) / 対象区でのふ化率 × 100
 補正死虫(卵)率が低い 感受性の低下が認められる。

アニバースMCは、本剤及び殺ダニ活性のある合成ピレスロイド剤が連用されている地域で、雌成虫及び卵について感受性低下が確認された(図3)。

パロックフロアブルは、県南部を中心に感受性の低下が確認された(図4)。

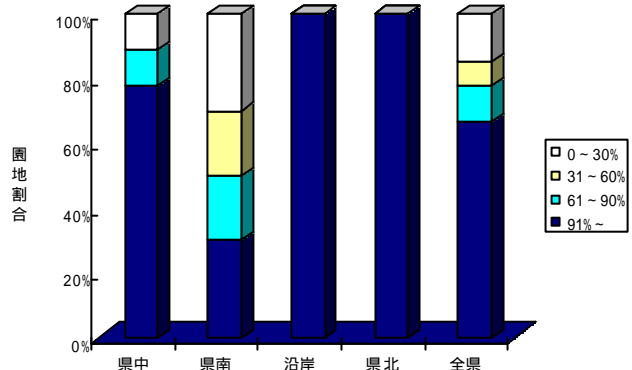
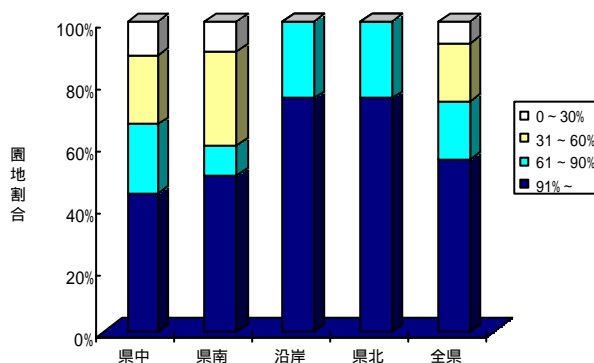


図3 アニバースMC雌成虫に対する補正死虫率の園地割合 図4 パロックフロアブル卵に対する補正死卵率の園地割合

カネマイトフロアブルは、一部雌成虫に対して効力にばらつきがみられたものの、感受性の低下はほとんど確認されなかった。

マイトコーネフロアブルは、全県で感受性が高かった。

防除対策

普通樹では主枝、亜主枝の徒長枝の下位葉、わい性樹では主幹近くの新梢下位葉をよく観察し、ハダニの寄生葉率が30%に達したなら速やかに防除を実施する。ただし、基幹防除剤がニッソラン水和剤もしくはパロックフロアブルの場合は、やや早め(寄生葉率20~30%)に防除する。

近年、目通りの寄生は少なくとも、薬剤のかかりにくい樹上部で多発している園地が散見される。このため、防除時には樹上部まで薬液がかかるよう十分量を丁寧に散布する。また、散布ムラの原因となる不要な徒長枝は早めに剪除し、薬液のかかりやすい樹形を維持する。

薬剤抵抗性ハダニの発現回避のため、同一系統の薬剤は1シーズン1回の使用に限る。また、複数年を単位とした薬剤のローテーションを厳守する。